

## 「こしんつあま」賛歌 ―祖母の思い出―

伊能 洋

いつの間にか私より年長の肉親は、姉一人を残すのみとなった。以前から、祖母孝（こう）のことを書いておかねばと思いつつながら、手をつけられずにいたが、覚えておくこともあやふやになって来たので、この辺で記憶の一端を書き留めておこうと思う。

伊能孝は、忠敬より四代目となる三郎右衛門景文とひさの長女として、慶応二年佐原の忠敬旧宅で生まれた。女ばかりの五人姉妹で、私が高校の頃まで四人が揃って長寿を保っていた。嗣子が居なかつたために、同族の伊能七左衛門家から端美（たみ）を婿養子に迎えた孝は、八十八年を同じ家で過し、生まれた豊の上で人生を終えるという、女性では珍しい生涯を送った人だった。一八六六年生まれの孝は忠敬の没年から僅か四八年後の誕生ということになる。三郎右衛門家の後見として、忠敬の遺品の整理・保存に力を尽くしてくれた同族、伊能茂左衛門蘭野は晩年の忠敬を見ており、孝始め五姉妹の名付け親であった。孝にとつて忠敬は、今私たちが考える以上に身近かな親しい存在としてのチヌウケイ先生であつたに違いない。

孝は私の父康之助、長女、次男と三人の子を生んだが、次男は十代で病没した。

たまたま太平洋戦争中に小学生だった私は縁故疎開で、東京原宿から終戦まで祖母の許に預けられ、佐原の国民学校に通うことになった。

末子の私が、成人して東京に居た姉や兄よりも、祖母と佐原に近しくなつた所以である。先般上梓の「世田谷伊能家伝存・伊能忠敬関係文書」で大変お世話になつた安藤由紀子さんはこの時の同級生で、直接祖母の話を聞かれたのが忠敬に関心を持ったきっかけになつたと言われている。六十年後にこのような深いご縁でつながろうとは思わなかつたことだ。祖父は私が二才だった昭和十一年に亡くなつたので記憶はない。

一都會育ちで田舎の暮らしにまつたく縁のなかつた子供の目には、映るものすべてが珍しかった。忠敬以前からさまざまな雨いをして来たので、小野川に面して大きな唐構えを持つていたが、祖父の死後は商売をすることはなかつた。店の前には出陣（だし）という専用の船着き場があつて、米俵を積んださつぱ船（和船）が着く光景を辛うじて覚えていた。

千坪ほどの敷地内には結構な面積の屋敷島があつた。戦時中の自給自足の必要もあつて、祖母は若い住み込みのお手伝いさんを相手に苗仕事にも精を出していたが、何と言つても彼女のライフワークは忠敬の遺品を保守すること、事務の顕彰、P・Rにいそむことだった。

毎日のように全国から見える旧宅の見学者に、丁寧に応対し、測量器具を縁側に並べ、大きな地図を吊るして説明するのが孝の日課だった。私はと言えば学校から帰ると、おくらと呼んでいた土蔵からの遺品の出し入れを手伝い、だれも居ない時には現在重要文化財に指定されている量程車（曳き歩いて距離を測定する）にまたがって縁側を走らせ、祖母に大目玉を喰らつたりしていた。

現在の天皇は小学生時代にも来宅されたことがあり、学年が近い私



は親近感を覚えてお迎えの列に並んで居た記憶がある。後年、平成四年には美智子さまと共に再度お出でになり、旧記念館など見学された。芳名録を見ると大正から昭和初期に知られた政治家、軍人、財界人、学者、作家、音楽家など多士済々の名前が並んでいるのに驚く。

今、思い出しても一般の見学者（小、中学生も多かった）に対して祖母が嫌な顔をしたり粗末な扱いをしたのを見た覚えがない。もちろん無償のボランティアで、昭和一九年に夭折を全うするまで実に六十年を越える天職であった。

一方、主婦としての日常の作業も多岐にわたり、四季さまざまな伝統行事を守り、例えばムシロを広げての梅干し作り、蒺藜の葉を一枚一枚干し並べてのゆかり作り、箕を振っての豆のさや取りなどが一幅の絵のように思い出される。「何があっても朝茶を「服」と朝食の前にはお茶と一翹の梅干しを頂くのが習わしだった。

旧宅は店と呼ばれていた四部屋棟と、忠敬書斎の五部屋棟とが、広い板の間を持つた台所を挟んで隣接していた。店の左半分は広い土間で、商売の終わり頃は油燈が並んでいたようだ。現在、店舗部分は江戸時代の間取りに復元修復されたので、当時とは多少異なる。書斎棟は、ほぼそのままである。

店の奥二つが祖母の部屋で、私が居たのは書斎東南の角の六畳、障子の外には用水を見下ろして手摺りの付いた長さ二間の張り出し廊下、今で言えばベランダがあり、まことに風流な部屋だった。が、ガラス戸などはなく火鉢だけの冬は隙間風が身に沁み、書斎の二部屋の長押しには数本の槍、薙刀が掛けられていて恐かったが、戦時中の金属供出で姿を消した。

屋敷内には、店と母屋の外に土蔵倉をはじめ二つの収納庫、薪蔵、油小屋（菜種油を絞る作業所）、味噌・炭部屋、納室、氏神様、離れと呼んだ一軒家などの建物群があった。

氏神さまは、母屋から数十メートル離れた五十坪ほどの敷地に、石積みの上台があり、五六段の階段を登った上にあった。一間四方ほどの瓦葺きの上屋の中に納められていたが、後には惟の太木が被さるように枝を張り、小さな神社並みの規模だった。伊能家のさまさまな年中行事はこの氏神様を中心に運ばれていたように思う。

現在は小さな本敷のみが用水横に残されている。

土蔵の扉は重く、鉄の大きな錠前が珍しかった。中には大きな長持ち、燈籠、和軍筒、二十人前ほどの客席、大皿、高張提灯、書箱、もちろん測量器具の数々など道具屋が今見たら流石である品々が所狭しと積まれていた。祖母はそのすべてを覚えていて、深すの手に聞取るといふことがなかった。遺品以外の品々の大方は、祖母がせくなつて市に寄贈するまでの間に、いつの間にか散逸してしまつた。

離れの一軒屋は三部屋ほどの小さな家だったが、常に親戚や縁者の青年が何人か、佐原中学（現佐原高校）に通うために寄宿していた。当時旧家では書生を置いたり学生を寄宿させるのはよくあることだったが、祖母の面倒見のよさは格別だつたようである。

新蔵には薪と共に枯松葉や枯れ草がうす高く積み上げられ、大八車も置いてあつて私たち子供には格好の隠れんぼの場所だつた。味噌部屋は細長い薄暗い土間で、漬物樽や味噌樽が黒々と並んでいくのが怖かつた。

土蔵横の横ね釣瓶は台所の水がめと風呂場の湯船に竹の水道管で連結していて、毎日の水汲みは私の重労働の日課だつた。察ね釣瓶の横には大きな無花果があつて柿の木と共に秋の赤しみだつた。土蔵脇には肉桂の木があり細根を掘つては齧つたものだ。

屋敷内を流れる幅一間ほどの用水は、昔は農業用水で橋樑を通り小野川を跨いで流れていた。石垣の間にザリガニが顔を出し、春には子蟹やタナゴが群れをなして上がつて来て私たちが歓喜の声を上げたものだ。大皿を浮かべて舟遊びをしたことも懐かしい。

因みに当時島で作つていたものや自生していたものを数えると、トマト、胡瓜、茄子、人参、大根、蕪、南瓜、まくわ瓜、里芋、蚕豆、いんげん、さやえんどう、十六ささげ、枝豆、ほうれん草、小松菜、

からし菜、つまみ菜、葱、蕪、山椒、茗荷、花では芍薬、立葵、コスモス、ダリヤ、向日葵、秋海棠、鶏頭、小菊などがあり多彩だつた。

殿前には使用人も多かつたようだが、町屋の娘だつた祖母が戦時中とはいへ、いっばしに島仕事をこなし、肥田糞まで担いだのは曾祖母の教育によるものだつたのだろうか。

なお、敗戦直後の東京は食糧難で野菜は貴重であり、月に一度くらい小学生の私がただ一人汽車に乗つて、リュック一杯島の野菜を背負い、東京の家まで運んだものだが、今の小学生を見ていると自分のことながら信じられない思いである。

祖母は小柄だが恰幅は良く、出入りの人々に「ごしんつあまし（新造さま）」と呼ばれて慕われていた。美人とは言えないが、笑顔が素敵で人々でエーモアのセンスもあり、絶対に人を見下したり、高飛車なもの言いをしない人だつた。

いたずら盛りの私は、もちろん怒られることもあつたが、本気で物差しを持って追いかけられたことがなつかしい。

浴室は外湯で中庭の隅にあり、母屋から十メートルほど離れていたが、夏など敷石の上を下駄を鳴らして戻ってくる祖母は腰巻き一枚で、おおらかなものだつた。

私の耳が痛んだ時には、雪の下の汁で名医ぶりを見せ、腰をこわせば直ちにゲンショウコヤセンプリを煎じて飲まされた。

新しいものも積極的に吸収し、トランプ、花札、ダイヤモンドゲーム、チェッカーなど遊び相手もよくしてくれた。

手先も器用で、お手玉や蜂蝶人形を作ることなどお手のものだつたが、特に見事だつたのは糸手毬を作ることでも十数色の絹糸をかがって、

何を見るでもなく正確な幾何文帳を測っていくのを嘔然として眺めていたものだった。

古和紙を裂いて紙縫りを作ることも学んだが、未だに祖母のように真つすぐで腰のある紙縫りを見ることは出来ない。

文字もよく書いた人で、巻紙を左手に筆を由に躍らせて手紙を書く姿が、子供心に不思議だった。分厚い手帖に太い万年筆で書かれた朝鮮旅行記を見た覚えがある。

整理、整頓もキチンとした人だったが、後年蔵をのぞくと「何々が入っていた箱」と上書きされた空き箱が丁寧に紐でくくられて積まれており、私たちは顔を見合わせたものだった。

今、数えてみると私が世話になった頃の祖母は、すでに七十代も後半でさぞ大変だったろうと思うが、常に屈託なく何かをしていた姿しか思い浮かばない。毎日生き生きと充実して過ごした晩年だった。

好奇心を失わず勤勉に生きることが長寿の秘訣だったのかも知れない。戦後の農地解放で佐原のあらかたの土地を失い、父も三井物産から移って社長となった三井水船が敗戦により整理会社となったために、経済的には祖母の人生の中で最も困難な時代だったと思うが、「困ったものだネ」と言いながら、祖母の笑顔が消えることはなかった。

祖母が亡くなって、佐原の旧宅を守る人間が居なくなったために、東京住まいの父母は旧宅と遺品を佐原市（現香取市）に寄贈する決心をした。耐震耐火の記念館設立は父母の積年の願いだだったが、国、県、市の協力を得て昭和三十六年四月に伊能忠敬記念館の開館が実現した。現在の記念館は二代目で、平成十年に川向二丁の旧茂左衛門家の敷地に新築されたものである。

つまるところ、忠敬より五代目の孝のお蔭で、忠敬の遺品は旧家に

よくある敬進や禊り立てを免れ後世に残ることになったと言えよう。慶応に生まれて、明治、大正、昭和と激動の八十八年を、明朝でフランスのとれた女性として、常に前向きに生きた祖母の一生は、実に興味深いものがあるが、一代記を書くだけの資料と筆力を持ち合わせないのが確としては残念なことである。



忠敬旧宅書齋外観

イラスト写真 伊能 孝

